

Title	ベトナム難民研究の視点 : 合衆国の研究事例と震災後の神戸の場合
Author(s)	住村, 欣範
Citation	年報人間科学. 18 P.135-P.150
Issue Date	1997
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5236
DOI	10.18910/5236
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ベトナム難民研究の視点

——合衆国の研究事例と震災後の神戸の場合——

〈要旨〉

本論は、ベトナム難民の文化状況について考察するものである。「他者を表象する」ということが問題として認識されるようになって以来、文化人類学では、文化を自足的で統合されたものとみなす文化観に疑問がもたれ、代わって文化は、交渉されるもの、あるいは進行中のプロセスとして捉えられるようになりつつある。しかし、ベトナム難民の場合、ベトナムについての「民族主義」や「共産主義」の言説の影響のもとに、依然本質主義的な文化観に基づいて対象化されている。この結果、ベトナム難民の内的雑多性は捨象され、その文化状況については十分に理解されていないままになっているように思われる。ベトナム難民は、定住先の社会に文化的に適応すると同時に、自分たち自身の間でも交渉を行っていることに注目する必要がある。これらのことを示すために、本論では、まず、ベトナムについての強力な言説が生み出された二十世紀後半の歴史過程を概観する。次に、「転置」「家族」「エスニシティ」という三つの概念について、その歴史過程に深く巻き込まれた合衆国のベトナム難民研究の問題点を考察する。

そして最後に、阪神大震災後に筆者が参与観察を行った神戸の事例を参考に、ベトナム難民の文化状況について研究する視点を模索する。

キーワード

ベトナム難民、文化状況、転置、家族、エスニシティ

住村 欣範

世界が互いに絡み合い、産出される言説が相互に参照される中で、「伝統」や「プライモージェイアル」なものから文化を語ることは不可能になりつつある。また、そういった概念を意図的に使う文化さえ見いだされるようになっていく。さらに、何らかの単位を設定しそこに本質的なものとして文化を見いだそうとすることは、他者を表象する際の根本的な問題であることも指摘されている。

しかし、そのような文化観は日常にも根強く存在しており、社会科学においても、「本質的文化」を何らかの説明のための決定要因に位置づけることは依然行われつつある。そして、ベトナム難民もそのような文化観に基づいて研究されることの多い対象の一つであり、二十世紀後半のベトナムに特徴的な歴史と結びついて特に硬直した対象化が行われているように思われる。

文化人類学ではこの文化という概念はまさに変化の途上にあるといえる。マクロとミクロ双方のレベルについて進行しつつあるこの変化を過不足なく言いあらわしているものを探すならば、「組織的に統合され、伝統的に持続するものではなく、交渉されるもの、進行中のプロセスとして文化を考える」ということになるだろう。^① 本論では後者の意味での文化を「文化状況」と呼ぶ。

以降、まず、ベトナムに特徴的な文化状況をつくり出した二十世紀後半の歴史過程を本論との関連において重要な点にしばって概観したあと、その歴史過程に特に重要な仕方に関わってきたアメリカ合衆国の社会科学分野でのベトナム難民研究の問題点を、「転置」家族「エスニシティ」という三つの概念を中心に明らかにする。そし

て最後に、筆者が震災の二週間後から約一年半にわたって参与観察を行った神戸のベトナム難民の事例を参考に、その文化状況について研究する視点を模索することにする。

I 「普遍国家」ベトナム

第二次大戦中に新たに「東南アジア」と呼ばれることになった地域は、脱植民地化の潮流の中で旧宗主国の抵抗を最も激しく受けた地域であった。中でもベトナムは、一九四五年の日本軍撤退後すぐにいわゆる「八月革命」を起こしてほぼ全土を手中にしたにも関わらず、その完全な「独立」が達成されたのは一九七五年であり、東南アジアの比較的大きな国家の中でも最も遅い例になっていた。このことには、二十世紀後半に特徴的な脱植民地化とは別のもう一つの力が、ベトナムに特異な仕方働いたことが関係している。

自由主義対共産主義という二つのブロックの対立が、その時代を動かしたもう一つの力であることは言うまでもない。独立闘争の過程でベトナムがこの対立に巻き込まれていく様子を、古田は「普遍国家」という概念を用いて説明している。^② この言葉が意味しているのは、帝国とは異なり個別的な性格をもっているはずの近代国民国家が、再び普遍的な理念と結びつけられるという矛盾である。しかし、その矛盾そのものはベトナムに特有のものではない。二つのブロックの中心になっていた近代以降の代表的な実験国家、アメリカ合衆国とソビエト連邦もそれぞれの仕方での矛盾に動揺してきたのであ

り、また、民族自決と共産主義が「支配と抑圧」という図式を共有するがゆえに、幾つかの新興国が独立と階級のどちらを優先するかという問題に悩まされることになったのである。

ベトナムが特殊なのは、次の三つの点においてである。まず、国民国家形成のまさに端緒にいたばかりの時点で普遍的理念のオプションを選び取らなければならず、その理念が未統合なまま存在していた複数の帰属意識と複雑で強い反応を引き起こしたということ。第二に、古い地政学的見地から（地理的連続性は二つの普遍的理念の拡大にとってそれほど決定的なものではなかったにも関わらず）、「独立」への潜在的可能性をもった一つの地域の二つの部分それぞれ別の普遍的理念を背負わされたということ。そして、それゆえにこの地域がブロックの対決のフロントになってしまい、あの悲劇的な戦争が続いただけでなく、主に自由主義陣営と呼ばれたブロックで「ベトナム」にまつわる大量の言説が生産されてきたということである。

これらの言説の類型のうち特に重要なものは、当然「民族主義」と「共産主義」の二つの概念を使って生み出される。ベトナム戦争の帰結を説明する「闘争の二千年」に見られるようなベトナムの民族主義的伝統を強調するもの。そして、「アメリカの友人」という言葉に見られるようなベトナム難民を非共産主義者としての規定するものである。

この二つの類型がそれぞれ、二十世紀のベトナムの歴史における普遍と個別のもつれ合いをどちらかの極で読みとったものであるこ

とは明らかである。従って、これらの非常に単純化された言説には、いずれの場合もあることが抜け落ちていく。つまり、ベトナム難民が生まれた時点でのベトナムは、国民国家としての統合が未完だったということである。^③そして、この欠落はベトナム難民研究にも確かに反映されている。

II 合衆国のベトナム難民研究における三つの問題

1 転置 (displacement)

「場所（特に国家）」とアイデンティティの結びつきを、フツ難民について研究を行ったマルキに従って「ルート (food)」と呼ぶならば、^④前節で取り上げた二つの言説の類型は、その「ルート」という概念に照射されることによって、ベトナム難民の対象化にも影響を与えている。「ルート」がそれぞれの仕方で読みとられる三つの位相のうち、まず、ベトナム難民研究に共通した問題である「転置」から考察を始めよう。

「難民」というカテゴリーはロシア革命という歴史的事件と共に生まれたが、その後の二十世紀の歴史において、このカテゴリーにあてはめられる現象は世界中の至る所に見いだされることとなり、むしろ構造的問題を反映したものとみなされることになった。マルキは、「難民の転置が、国家や組織や学者によって、他の種類の離郷 (deterritorialization) とは異なる仕方では構築されてきた」と述べる。^⑤つまり、「故地」から「切断」された存在となった難民は

「異常」なものとして扱われ、これを基調とする言説が科学を含む幾つかの領域で生産されてきたというのがその内容である。^⑥マルキが指摘する「精神的異常」や「規範的行動原理の喪失」といったテーマを持つ言説が、本論で取り上げる比較的新しい難民の一つベトナム難民についても生産され続けていることは確認される。^⑦

しかし、一方で、ベトナム難民の場合、二十世紀に普遍的な現象としての「難民」というカテゴリーとは、異なる対象化も同時に行われている。

ヴァンは中年の男性で、ベトナムの共産主義体制からの逃避を一度ならず経験した。一九五一年、彼が十代の時、彼の家族は共産主義政府によるローマン・カソリックに対する迫害のせいであつたから逃れようとしていた。中略一二五年後、ヴァンは共産主義者から逃れようとしていた自分をも一度見出したのである。ヴァンは南ベトナム政府内の友人達の助力によってベトナムを脱出した。彼らが、彼と彼の家族が香港に向かう船に乗れるよう手配してくれたのだ。ヴァンの旅は彼の同国人の多くが経験したほど恐ろしいものではなかったが、彼が詳しく話してくれたところによると、難民キャンプでの経験はこの上なく不快なものであった。^⑧

この引用に表れる要素「共産主義体制による抑圧」「自由への逃避」「脱出過程での恐怖」は、インタビューを手法の一つとするほとん

どのベトナム難民研究の分野で執拗に繰り返されるものである。さらにこの例は、「二度の逃避」^⑨について語られているという点で最もまとまったものとなっている。これらの要素の継起的列挙もまた「転置」の状況を説明するものではあるが、それが構成しているのは「異常性」ではない。

合衆国とベトナムが同じ歴史に巻き込まれていたという強い感覚が、ベトナム難民と合衆国さらにそこで研究する研究者たちを同じ側に置く。そして、強力に言説化されている「民族主義」という一方の極でさえ無視され、「共産主義」という極だけでベトナム難民を読みとることによって、そこでは「正当性」の物語が生み出されているのである。このようなインタビューを行ったものが反共産主義者だとか、それが真実に基づくものであるかというようなことを問題にしているのではない。このインタビューそのものが（それを行った側もされた側も）固有のコンテクストに埋め込まれているということを描きたいのである。合衆国はベトナム難民の最大の受け入れ先であるが、それは合衆国が正当性を持っているからではなく、ベトナム難民と合衆国の間にこの「正当性」の物語（「共産主義」による切り取りの後には、大抵「彼らは自由を目指してやってきた」が続く）が準備されているからなのである。

おそらく、より単純な誤解に基づく差別に対しては啓蒙的意義を持つていようと思われるこの物語をあえて問題にするのは、その物語の過程において、ベトナム難民は「故地」から「切断」されるとともに、新たな「場所」に「移植」される、つまり、移住先の

一国家（合衆国）における（正当な）マイノリティとして対象化され、その結果、文化状況について多くのものが捨象されてしまうことになるからである。このことは、例えば次に引用する節に明確に表れている。

分節化した住民のすべてを適切に包摂できるような国民としてのコンセンサスをベトナム人が模索し続けてきたということについて、歴史家は巧みに取り組んできた。しかしながら、そのような仕事は、今や定義上別の国民が求める国家のコンセンサスの一部となっている合衆国のベトナム難民の難局を検証するには、限られた助けにしかない。^⑩

今やベトナム難民の「ルート」は合衆国に移し替えられたのだ。全ての学者がこのように明言してしまっているわけではなく、多くの場合、ベトナム本国の文化状況を何気ないそぶりで無視することによって「転置」は行われる。だが、実際に文化を扱わなくてはならない段になると、この「転地」によって矛盾がもたらされる。つまり、ベトナム難民を故地から完全に切り離されたものとしてしまうと、難民の中の一カテゴリーとして「正当性」以外の特色を持たない文化的に無色透明な存在になってしまうのである。「転置」の概念がベトナム難民の対象化の仕方を決定する一方で、何らかの形で「文化」といえるものが残されなくてはならなくなる。

2 家族

文化を中心とする研究の領域では、「転置」は文化にある特異な加工を施して行われる。その加工とは家族の性質を本質化してしまうことである。ハynesはベトナム難民の家族についての研究を概観して、以下のように述べる。

ベトナム難民についての議論は、状況に左右されない親族の性質、ベトナム人にとって、それ自体で独自の存在であるもの、他に還元できない価値を持ち、ただ一つの生のあり方としての家族、あるいは根本的な構成単位つまり凝集と持続の基本的な源泉としての家族に重きをおいてきた。^⑪

ベトナム難民の本質を家族にすえるこのようなスタンスは、いかにも明快である。なぜなら、それは「故地」ベトナムの地域を単位とした文化特性とベトナム難民の生を一直線に結ぶように見えるからである。しかし、家族は人類の普遍的凝集の源泉であるといった場合とどこが違うのか、あるいはまた、一旦「故地」から「切断」されたはずのベトナム難民がなぜ「家族」だけを本質として保ち続けているのかは決して説明されることはない。

移民の成功・不成功の原因を文化的本質に求める移民研究に伝統的な試みが、しばしばトートロジーに陥ってしまうことはすでに指摘されている。^⑫文化が対象の社会の視点から切り離されて本質化している場合、その正体は成功・不成功の法則を最も単純に説明する

ために編み出された一変数であることが多い。そして、この変数に「人種」や「知能」ではなく「文化」が使われているということこそが、依然、社会科学において「ルート」が所与のものとされる傾向があることを示している。ただ、「転置」では「ルート」が「切断」されたと捉えられることによって、難民の「異常性」の言説が生み出されていたのに対し、「家族」についての研究では「ルート」が「本質化」されることによって、移民集団の「合理性」の物語が生み出されるといえる。

また、家族を研究対象とする分野では、家族が「移植」される先の社会のコンテクストを非常に重視する。これ自体は、問題ではなく、例えばキプリアの例に見られるような優れた研究も現れている。彼女の場合も「家族集団主義というイデオロギー」をベトナム難民の文化的本質として研究の前提としている^⑬。だが、それよりもむしろ、「合衆国の家族の生におけるヘポスト・モダン」状況^⑭が「ベトナム人の伝統的な家族システム」に大きな影響を与えていく可能性があることを指摘し、ジェンダーや世代と家族の關係に研究のかなりの部分をあてて考察を行っている。そして、「パッチワークキング」という概念を中心に、家族を断片化させかねない合衆国の「ポストモダン」的状況と家族の「伝統的」あり方を何とか調停しようとするベトナム難民の試みを細部に渡るまで描き出そうとしており、この結果、家族という文化的本質はともすると本質でなくなっ

てしてしまいかねないほどに相対化されている。

しかし、別の部分でもう一つの問題が見いだされる。彼女は「ポ

ストモダンの状況」の他に、従来の移民研究においても一般的な、「労働市場」「政府の政策と援助」「エスニック・コミュニティ」を社会的コンテクストとして挙げている^⑮。問題となるのは、彼女が「ベトナム難民のエスニック・コミュニティ」を他の二つよりも信頼の置ける「経済的なあるいは社会的援助の源泉」であると自明視するとき、それは何を根拠にしているのかということである。

家族経済において、家族以外のネットワークが重要な役割をもっていることは十分考えられる。しかし、エスニシティを扱う次の研究事例を見た場合、彼女がエスニック・コミュニティと呼んでいるものの性格が、「家族」の場合と同じように「移植」を説明するために単純化されているように思われるのである。

3 エスニシティ

ベトナム難民のエスニシティそのものを扱う研究は、「家族」の物語の洗練度と対比すると遙かに散逸した感じを抱かせる。家族についての研究が「集団主義」という一つの文化的本質を研究の前提とするのに対し、エスニシティの場合、何らかの文化を客観的に本質的なものに設定しようとする複数のレベルにそれが見いだされてしまう。そして、移民集団を名づけるときに一般的に使われる移住元の国家を単位とする集団の存在が見えにくくなってしまいう、というベトナム難民に特徴的な問題に直面するためである。例えば、次の引用にはこの問題への戸惑いが、ベトナムに対する「民族主義」の極のステレオタイプを含む形で端的に表れている。

ベトナム難民はエスニックな集団の成員という概念を明確には持っていない。しかし、彼らは強力な諸国家との何世紀にも渡る闘争によって鍛えられた強い国家伝統・文化の当事者なのだ。^⑬

ベトナムを伝統的に統合性の強い国家とし、共産主義という線でベトナム難民を切り取った場合に直面する矛盾である。他の難民と比べて相対的にベトナム難民のエスニシティとしてのアイデンティティ形成が進んでいないという指摘は他にも見いだされる。^⑭また、ベトナム難民が「民族」「宗教」「出身地域」「政治的立場」などに基ついた複雑な分節をもち、それらの分節の間の葛藤や衝突が、エスニシティ間の衝突よりもより頻繁に深いレベルで起こるようになっていともいわれている。^⑮

次に挙げる引用部分の「民族」と「宗教」に基づくアイデンティティの解釈は、エスニシティの問題を正面から扱う数少ない研究者の一人ルートルリッジのものである。ここでは、「民族≡国家」（ベトナム難民には中国系ベトナム人や少数民族が含まれているが、ベトナム人という民族とベトナムという国家はしばしば同一視されて扱われる）に基づくアイデンティティを、他のレヴェルのアイデンティティと何とか調停しようとする試みがみられる。

組織的であるとないつに問わずミサの全ての面に、ベトナム

文化とカソリックの信仰体系を相互に関係づける特別な意図を持った要素が見られる。おそらく、全てのなかで最も重要なのはベトナム国歌を歌うことだろう。その歌は、司祭がはじめて姿を現すときに歌われる。そしてその結果、集団のアイデンティティの二つの根本的な要素が関係づけられる。つまり、ベトナム人であることカソリック教徒であることである。これらの実践を通して、集団はベトナム人とカソリック教徒という二つのアイデンティティを両方持つことになるのである。^⑯

礼拝に宗教アイデンティティを、国歌に国家（民族）のアイデンティティをとこの上なく単純明快なこの読みとりが、どれだけ主張するに値するものであるかはともかく、一人のベトナム難民が複数のアイデンティティをもっているという状態は容易に想像できる。しかし、その複数はルートルリッジが強調するように同じ場所に関連づけられることによって確認される必要はない。ベトナム人という民族的指標に基づいたアイデンティティを考察するには、それが認識されるような共通のコンテキストが、分節を越えてどこで生成しているかを見いだすことが最終的に必要となる。

これについて示唆的なのはゴールドの研究である。彼が研究対象とするアクティヴィストたちは、ベトナム難民の生の方向性を意味づけるために、合衆国の社会的コンテキスト（あるいはそれとの対比）から「伝統的なベトナム文化」や「マイノリティの理念」を採用する。ゴールドの主張の力点は、二つの理念がそれぞれアクティ

ヴィストの古い世代と新しい世代を代表するものであり、互いに反発しあうということにある。これらの理念は、ベトナム難民が下位の分節を越えて採用しうるものであり、合衆国社会のコンテクストとの関連でベトナム難民の文化状況がどのように変化していくかを考える上で重要だといえる。

しかし、ここでもまた下位の分節の問題につきあたる。アクティヴィストの活動は、一定の範囲の難民を組織化することはあっても、エスニシティやコミュニティの大きな部分を包み込むような形で発展することはない。アクティヴィスト達は共通の理念によってベトナム難民を導こうと考えるが、他のベトナム難民は、しばしばその集団の内部の差異に基づいてアクティヴィスト達の活動を読みとる。結局、現状では文化状況についての議論は、下位のレヴェルでの差異化が強固に働いていることを確認するところで止まってしまっているのである。

このことはエスニシティに限ったことではない。これまで見てきた研究例が、ベトナム難民を対象化する際に中心的に使ってきた幾つかの概念がある。「伝統」や「民族」や「宗教」といった概念化された象徴はもはや学者の専売特許ではない。対象となる人々もこれらの象徴を操る。そして、「マイノリティ」を取り巻く政治的な場が特に整備されている合衆国のような場所では、これらの象徴がベトナム難民自身にとっても非常に大きな意味をもっていることも間違いないだろう。しかし、何か別のことを語るための参照点として固定された瞬間、それらの概念は要因であると同時に結論にもな

ってしまふ。その結果、ベトナム難民という当事者達が使うのと同じ政治的意味をもつ概念となり、その意味を閉じてしまふのだ。

キプリアの研究とゴールドの研究は、いずれも「世代」のような流動的な要素に着目することで、参照点となる概念が相対化される余地が残されているため、ベトナム難民の文化状況の動態をそれぞれの視点から明らかにしているといえる。しかし、ここにももう一つ注意しなければならない点がある。例えば、世代間の断絶というものが現代の社会を特徴づけるのにあまりに普遍的なものであることだ。^②

普遍的な現象と文化的本質のいずれかに還元されてしまった場合、啓蒙的訓示は引き出せても、固有の文化状況について何かを理解したことになる。これを避けるためには、非常に多くのレヴェルに雑多に見いだされる象徴的概念を、恣意的に選んで研究の前提に据えるのではなく、それらの象徴が当事者たち自身によってどのように扱われ交渉されているかを観察する必要がある。合衆国におけるベトナム難民研究は、これらの概念が多くの場合実体的なものとされ、個々の研究領域で別々に扱われている点に乗り越えなければならぬ問題を抱えているといえる。

III 震災後の神戸のベトナム難民

1 「コスモポリタン」

神戸西部のある区を中心に、ベトナム難民が集中して定住する地

域は広がっている。震災後、この地域に居住する七〇〇人あまりのベトナム難民のうち半数が避難所での生活を体験した。三箇所あった主なベトナム難民の避難所のうち公園にできた避難所の一つは、日本人が避難していた避難所にさまざまな理由でいられなくなったベトナム難民が自発的に形成し、ベトナム難民以外の避難者も移り住むようになったものである。合衆国の場合と同様、神戸のベトナム難民も諸団体や近隣社会からの援助を受けると同時に差別にもさらされている。震災後のような特殊な状況では特にこのことが集約されて表面に表れることを示す例がいくつもみられた。

そして、また一方で「宗教」や「地域」に基づいた集団内の差異も観察された。筆者が集中して観察することになった避難所には、「南部出身のカソリック教徒」「南部出身の仏教徒」「北部出身者」と分類されるベトナム難民が居住していた。この分類は、三つの集団のグループの存在が外部の者（同じ公園にくらす日本人や在日韓国朝鮮人の避難者やボランティア）の目にも明らかになったときに、「南部出身のカソリック教徒」の範疇に入るベトナム難民によって提示されたものである。それは、予備知識のない外部の者たちのためにかなり単純化されたのか、実際には幾つかの例外を含んでいた。しかし、この分類に従って避難所内の居住区域が分かれ（あるいはそう説明され）、後に一時的にはあるが避難所運営の代表がそれぞれに分かち出されたことなどから考えて、ベトナム難民自身にとっても有意な区分であったことがうかがえる。

この避難所で初期にベトナム難民の取りまとめとベトナム難民以

外の避難者やボランティアとの調停役（以下「リーダー」）をしていたのは、「南部出身のカソリック教徒」の範疇に入る三十代後半の男性であった。その避難所ができた経緯から見て、身軽な独身で日本語にも比較的堪能な彼がリーダーになるのは自然な成り行きだったといえる。そして、「南部出身」とラベリングされる二つの範疇の人びとが、公園に避難するベトナム難民の大半を占めていた段階では、彼の運営はその機能を果たしていた。

しかし、四月に入り「北部出身者」のグループが、公園内のそれまでいた二つのグループとは別の部分に急増するようになってから状況は一変した。問題となったのは、この「北部出身者」のグループがかなり遅れて避難してきたことだ。彼ら自身の説明によれば、地震前後にテト（陰暦で行われるベトナムの正月）のため一時帰国していたということだったが、リーダーや彼を直接支援していたボランティアとベトナム難民以外の避難者の一部では別の見方がされるようになっていた。マスコミでその避難所が報道されたために全国から集まるようになった救援物資を目当てに、そのグループが移り住んだのではないかというものである。²⁾五月になると、この「北部出身者」のグループは数の上で他の二つを圧倒し始め、リーダーの避難所の運営は機能しなくなり、彼はボランティアの知り合いを頼りに東京に移って行った。

リーダーが去った後、避難所の運営形態が変わり一時的にベトナム難民の各グループから三人の代表が出され、彼らが日本人の代表及びボランティアの代表と合議して避難所を運営することになっ

た。運営会議と呼ばれるようになった場では、ベトナム難民以外の避難者からもベトナム難民の分節を意識した発言がされるようになっていた。この分節間の葛藤と外部から介入への対処は、交渉を完全に断ち切ってベトナム難民だけを外部から隔離したり、個々の下位の分節を孤立化したり、あるいは何らかの形で強引に政治的統合を行うような方向では現れなかった。

有効な対処となったのは、ベトナム難民の新しい代表者の一人がその運営会議の場で発した「北も南もない。ベトナム人も日本人もみんな同じ人間だ」という言葉だった。コンテキスト離れてそれだけ聞いてしまえばあまりに陳腐に聞こえてしまうこの発言が効力をもち、先の葛藤と外部からの揶揄は一応下火になった。

このことには、その避難所そのものの状況が大きく関係していると思われる。つまりそこは、日本人とベトナム難民そして在日韓国朝鮮人の他にもごく少数のバングラディッシュ人や中国人の避難者があり、また、日本人ボランティアの他にケベックのバッチをつけたカナダ人ボランティアや定期的に救援物資を運んでくるドイツ国籍のロマがいて、ほとんど誰もが「差異」という言葉の意味を重層的かつ相対的に意識せずにはいられないような場所だったのである。

この事件は、マルキのフツ難民についての事例における「(都市の社会的コンテキストから引き出されあるいは「借りられた」複数のアイデンティティを吸収し操る方法を見いだそうとする傾向」を持つ「コスモポリタン」な難民^③、あるいは、ゴールドのいう若い世代のアクティヴィストの萌芽だったのだろうか。その発言は、あ

らゆる差異を超越することで、ベトナム難民の外部と内部における差異が本質なものとして固定化されることを拒否してはいる。しかし、それは震災後の避難所という特殊状況を反映したものにすぎず、依然、従来の帰属意識にとって代わるような何かが社会的コンテキストから引用されているわけではない。

震災直後の避難所にベトナム難民を見いだしたマスメディアが、彼らを「出稼ぎ外国人」と報じたことに見られるように、日本の社会にはベトナム難民と共有されるような象徴が希薄である。ベトナムと同じ歴史に巻き込まれていたという感覚が濃厚で、ベトナム難民を言説化する際の参照点が強力に存在している合衆国の場合(一般社会ではベトナム難民はベトナム人であるというだけで共産主義者とみなされることさえあった)とは非常に異なっているといえる。震災から一年たった頃、日本人のボランティアや神戸の地域住民も加わって、ベトナム難民と関係を持つ機会が組織的につくられるようになった。神戸の社会が、ベトナム難民を微視的な視点から再発見し、意味づけ、象徴を共有する作業は、震災を境に加速されたばかりなのである。

2 差異の調停

七〇〇人という非常に小さな規模のベトナム難民は、現時点では、自らを語るのに有効な象徴を見いだすことのないまま都市の中に埋没してしまっているように思われる。ただテトの会を無邪気に楽しむ若者。サイゴン陥落直前にベトナム中部の高原地帯からほとんど

徒歩でサイゴン（現ホーチミン市）まで帰ったときの話を唐突にはじめ、何の意味づけも与えずに話し終えてしまった（私にはそう見えた）元兵士。市によって避難所が廃止されることになりほとんどベトナム難民がいなくなった後も公園の避難所に頑固に居座り続けた一族。そして、経済的に困難な状況の中でただ黙々と働き子供を育てる多くの人々。これらのベトナム難民は、明確な言葉や行動によって自己を語ることはないが、かといって決して彼らを取り巻く文化状況から切り離された真空の中で生を営んでいるわけではない。彼らは移住先の社会に対応すると共に、移住以前から継承する差異に対しても調停を行っているのである。震災から一年半たった頃に行われたある女性（以下「彼女」）の結婚を例に、このことを考えてみよう。

彼女の家族はカソリック教徒で、六十歳を越える彼女の父母は北部ベトナムの生まれでもあり、いわゆる「二度の逃避」を経験した人たちである。一方、彼女の結婚相手は横浜に定住するベトナム難民で「中国人」の「仏教徒」（この呼称は二つとも彼女や彼女の家族によって使われたものである）であり、結婚のために改宗の準備を進め、結婚の約二ヶ月前にカソリック教徒になったばかりの男性であった。

結婚の準備は、彼女が家族呼び寄せ制度を使って三年前に日本に渡ったときから始まっていた。結婚資金を貯めることや結婚相手の改宗の他にも、家族を様々な面で巻き込みながらこの準備は進められていった。例えば、日本での生活が長い彼女の妹は、結婚式で北

部から来る親族（結局参加しなかったが）に会うのに先立って、父親から「正しい北部ベトナム語」の発音を練習させられていた。

彼女と結婚相手は結婚の一ヶ月ほど前にベトナムへ帰り、結婚までの間をそれぞれホーチミン市の弟の家と叔父の家で過ごし、結婚に先立つ儀礼的会食などが行われた。結婚式はカソリック教会で行われ、参加者のほとんどは彼女の親族だった。一方、披露宴は二百人ほどを集めて新郎の叔父の経営するホテルのレストランで行われ、結婚式に参加した彼女の親族は全員参加したが、今度は新郎の側の中国系ベトナム人の親族や知人の方が圧倒的に多くなっていた。

結婚式に参加した彼女と新郎の近い親族の何人かも難民で、彼女を中心に五親等内でみた場合、その定住先は日本も含めて五カ国に及んでいた。結婚式の後、二つの親族が会食する機会が何度かもたれ、若い世代を中心に日常的交流がもたれるようになった。そして、式の一ヶ月後、新しい夫婦は横浜に、式に参加した彼女の母親と妹は神戸にそれぞれ帰っていったのである。

ここで筆者が思い出すのは、避難所の三つのグループのことである。一連の事件が、グループ間の差異の輪郭を明瞭なものに見せていたが、実際にはこれらのグループには、その指標からみると例外的なものが含まれていた。少なくとも、「南部のカソリック教徒」には中部や北部の生まれ（国外に出る前には南部に居住）の人々が、「南部の仏教徒」にはカオダイ教徒が、そして、「北部出身者」のグループには中国系ベトナム人が含まれていたのである。さらにとど

のような例外があったか、これらの例外的な人々が実際にどのような役割を果たしていたか、残念ながら今となっては知ることは難しい。ただ、ここで言えるのは以下のことである。

まず第一に、分節間の境界を越境する例は他にも見られ、この越境はベトナムに残る親族をも巻き込んで行われることが多い。²⁴そして、それは定住先の難民だけの問題ではなく、ベトナム本国の帰属意識の調停の過程とも密接に結びついていると言ふこと。第二に、そういった従来の帰属意識の規範からはずれる行為は、ベトナム難民のコミュニケーションの日常において、道徳性やときには嫉妬や称賛をもって語られ、当事者とその家族以外の人々にとっても分節間の差異の現状を確認する機会になっているということ。そして、第三に、彼らのネットワークはベトナム本国だけでなくしばしば世界的規模に達しており、一国家における一マイノリティという枠をはずしてその関係を観察してみる必要があるということである。

彼らは難民ではあるが、決して本国や世界に散らばる親族との結びつきを失っているわけではない。少なくとも神戸のベトナム難民の場合、現在においてより特徴的な過程は古くからある差異を縫い合わせる場で深く静かに進行しているのかも知れない。そして、この過程こそが、移住先の社会への対応を含めた彼らの文化状況の進展にも少なからぬ影響を与えているように思われるのである。

IV 終わりに

本論では、文化を本質的なものとする捉え方が、他の多くの場合と同様、ベトナム難民の文化状況の考察においても有効でないことを主張してきた。この点について、本論の元となった修士論文においては、文化的差異が構築されるプロセスを重視するF・パースの「エスニック・バウンダリー」理論の応用の可能性を指摘した。²⁵神戸のベトナム難民に見られたような通常例外的と見なされる個人の帰属の変更を有意な形で扱える可能性を持っているからだ。しかし、本来、この理論は「安定的で持続的な二分法の状態」に向けられていたものであり、(このことで応用の根本的意義がなくなるわけではないが)二分法よりは遙かに複雑で流動的な状態にあると思われるベトナム難民に應用するには実際上の問題点を抱えていることも確かである。

ベトナム難民の集団内の差異は、民族や地域や宗教といった個々のレヴェルの差異がずれながら重なり合っており、単純に切り分けられるような明確な切り口を見いだすことはできない。そして、これらの差異は、定住先の社会のコンテクストとの対比のみによっていずれかのレヴェルで本質化できるものでもない。それらの差異がどのような意味をもち相互に絡み合っているかということ、ベトナム難民の発生の前と後の両方についてベトナムの国民国家形成の問題と合わせて考察することからはじめ、さらに定住先の社会におい

てそれらの差異が維持され調停されていく過程を観察する必要がある(これらの基礎的データは戦争の影響もあって依然不十分なままである)。

そしてまた、定住先の国家とベトナム本国をも越えて広がっているベトナム難民のネットワークも、文化状況に重要な影響を与えている可能性がある。本論では、親族の関係がその一つとして考えられることを示すにとどまったが、それ以外の面でも定住先の国家をはみ出す例がある。例えば、ロサンゼルスやパリでは、移住した著名なベトナム人歌手達が一同に会して行われる歌謡ショウのようなベトナム難民にとっての公共の場がある。社会的コンテクストの質の違いと共に、合衆国と日本のベトナム難民のおかれている状況にかなりの違いがあることを感じさせられる点でもあるが、これらの歌手のミュージック・テープやビデオは日本や他の定住先にもたらされ、さらにベトナム本国にさえ逆輸入されている。そのテープを聴き、合衆国やカナダで出版されるベトナム難民を題材としたベトナム難民によって書かれたベトナム語の小説を世界中で同時に読む人々は、あるいは「ベトナム難民」という枠組みで自らを想像し始めているのかも知れない。

しかし、少なくとも神戸の場合、「遠隔地ナシヨナリスト」も「コスモポリタン」もまだ現れてはいない。ベトナムについての言説とベトナム難民研究の双方で、その内的雑多性は欠落するか矛盾を抱えたまま放り出されていた。それを含めて、彼らの文化状況がどのように進行しているのか、それは読みとられるという意味において

も、当事者たちにとって思い描かれるという意味においても、未だ一つの概念で括れるような形にはなっていない。

注

- (1) James Clifford, *The Predicament of Culture: Twentieth Century Ethnography, Literature and Art*, Harvard University Press, 1988, p.273
- (2) 古田元夫『ベトナムの世界史』東京大学出版会、一九九五年、一五五頁。
- (3) ベトナムの国民国家形成の問題については、以下の論文がベトナム難民との関連で概論的考察を行っている。安世舟「アジアにおける国民国家形成と難民問題——一つの比較政治学的アプローチ——」国連大学・創価大学アジア研究所編『難民問題の学際的研究——アジアにおける歴史的背景の分析と対策』お茶の水書房、一九八六年、所収。また、「民族」の問題に限定して見れば次の書が参考になる。古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命の中のエスニシティ』大月書店、一九九一年。
- (4) Liisa Malkki, "National Geographic: The Rooting of Peoples and the Territorialization of National Identity among Scholars and Refugees," *Cultural Anthropology* 7(1): 1990, p.24
- (5) *ibid.*, ebd, p.25. "displaced"を"uprooted"と同列に扱っていることからわかるように、マルキは本論の「切断」の意味でのみ"displacement"を使用している。本論では、「切断」だけでなく「移植」の意味も含め"displacement"を「転置」としたので、ここでも統一した。「一般に"displacement people"が"refugees"と同義に扱われることには留意されたい。
- (6) *ibid.*, ebd, pp.32-33

- (7) 典拠がないが、A. Chambon, "Refugee Families' Experiences: Three Family Themes-Family Disruption, Violent Trauma and Acculturation," *Journal of Strategic and Systemic Therapies* 8 (bonus issue), 1989, pp.3-13
- (8) Paul Rutledge, *The Vietnamese experience*, Indiana University Press, 1992, p.109. この他、この例を「家族」だとして扱って取り上げているキプリンは「これとは異なる同様のより長いインタビューを主要の冒頭に置いている。その上、以下のようなくつなぐ難民の経験についてのインタビューをまとめたものの場合も同じ要素に多くを求め、それに従って構成されている。James M. Freeman, *Hearts of Sorrow: Vietnamese-American Lives*, Stanford University Press, 1989, or Al Santoli, *New Americans: An Oral History*, Ballantine Books, 1988.
- (9) 「二波の移民」とは、一七〇四年一七五四年のシヤネーン協定成立による南北分断前後に発生した「国内難民」を指す。この「国内難民」は、主にベトナム北部から南部へのカソリック教徒を中心とした人口流出であり、一九七五年以降のベトナム難民の文化的雑多性の要因の一つとなった。「鉄のカーテン」の完成期を含む合衆国の難民に対するイデオロギーの変遷については以下の書を参照せよ。Valerie O'Connor Sutter, *The Indochinese Refugee Dilemma*, Louisiana State University Press, 1990.
- (10) D. Haines, D. Rutherford & P. Thomas, "Family and Community among Vietnamese Refugees," *International Migration Review* 15(1), 1981, p.311
- (11) D. Haines, "Kinship in Vietnamese Refugee Resettlement: A Review of the U.S. Experience," *Journal of Comparative Family Studies* 19(1), 1988, p.10
- (12) エドゥアイン・イームズ&ジェニリス・G・グート「都市におけるエスニック集団—母文化を共通にする集団」青柳まさ子編・監訳『「エスニック」とは何か…エスニシティ基本論文選』新泉社、一九九六年、九八—九九頁。
- (13) Nazi Kiblia, "Household Structure and Family Ideologies: The Dynamics of Immigrant Economic Adaptation among Vietnamese Refugees," *Social Problems* 41(1), 1994, p.82
- (14) Nazi Kiblia, *Family Tightrope: The Changing Lives of Vietnamese Americans*, Princeton University Press, 1993, pp.167-172
- (15) *ibid.*, ebd. pp.85-87
- (16) Steven J. Gold, *Refugee Communities: A Comparative Field Study*, Sage Publications, 1992, p.52
- (17) Yen Le Espiritu, "Beyond the "Boat People": Ethnicization of American Life," *Amerasia Journal* 15(2), 1989, pp.61-62
- (18) *op. cit.*, Rutledge, 1992, p.109. この民族や宗教や明確に重ならない地域主義の例は珍しくない。この上、この「南進」と呼ばれるベトナムの領土拡大過程と植民地化以降の分断状態が重要な要因と思われる。この上、この例を参照せよ。
- (19) Paul Rutledge, *The Role of Religion in Ethnic Self-identity: A Vietnamese Community*, University Press of America, 1985, p.65
- (20) Steven J. Gold, "Styles of Activism within Refugee Communities: The Case of Soviet Jews and Vietnamese," *Kroeber Anthropological Society Papers* 65-66, 1986, pp.35-48
- (21) Eric Hobsbawm, *The Age of Extremes: A History of The World 1914-1991*, Vintage Books, 1994, p.15

- (22) 「北部出身者」とラベリングされるグループは、「共産主義」を参照点とする「正当性」の物語からはずれる要素が多いために、一般的にも「フォーチュン・ハンター」としてみられる傾向が強い。「正当性」の物語の対極に現れるこのイメージについては、以下の論文を参照せよ。Florence Bear, "Give me ... your huddled masses": Anti-Vietnamese Refugee Lore and the "Image of Limited Good", *Western Folklore* 41(4), 1982, pp.275-291
- (23) op.cit., Malkki, 1990, p.36
- (24) 川上郁雄「在日ベトナム難民の異文化適応―定住適応過程と家族観の変容」『比較日本文化研究』一号、一九九四年、一七頁。川上が本国の家族との結びつきの一つとする送金は、震災によって経済的打撃を受けた家族でさえ続けていることが確認された。
- (25) F. Barth, "Introduction: Ethnic Groups and Boundaries." In F. Barth (ed.), *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*, Little Brown, 1969, pp.9-38. (邦訳：青柳まこと、前掲書、所収)。「境界」の概念については以下の論文も参照。小泉潤二「境界を分析する―グアテマラの場合」黒田悦子編『民族の出会い形』朝日選書、一九九五年。
- (26) B・アンダーソン「遠隔地ナショナルリズム」の出現『世界』一九九三年九月号、一八九―一九〇頁。アンダーソンは「遠隔地ナショナルリスト」の例としてロサンゼルスベトナム人を挙げる。

Cultural Situation of Vietnamese Refugees: A Review of the Studies in the U.S. and a Case in Kobe

Yoshinori SUMIMURA

This paper discusses the cultural situation of Vietnamese refugees. After “representation” became problematic in studies of culture, anthropologists started to think of culture as a negotiated, present process rather than an organically unified or traditionally continuous entity.

However, Vietnamese refugees are still objectified based on the essentialist concept of culture, under the influence of discourses invented about Vietnamese “nationalism” or “communism.” As a result, studies have overlooked some aspects of Vietnamese refugees’ cultural situation, particularly intra-ethnic diversity. It’s important to see that Vietnamese refugees negotiate their culture not only with host societies but also among themselves. In this paper, first, I will briefly survey a historical process in the latter half of the twentieth century in which the discourses about “Vietnam” have been produced. Next, I point out some problems about the concepts of “displacement,” “family” and “ethnicity” of the social science studies in the United States, which have been deeply involved in the historical process. And then I refer to a case of Vietnamese refugees in Kobe after the Great Hanshin Earthquake to understand the cultural situation now in process among them.

Key Words

Vietnamese Refugees, Cultural Situation, Displacement, Family, Ethnicity